

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520910

研究課題名(和文)バリ=ヒンドゥー教徒の社会における「空間の圧縮」とその帰結

研究課題名(英文)The 'space compression' of Hindu Balinese society and its consequences

研究代表者

中村 潔(Nakamura, Kiyoshi)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：60217841

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、移住先で新たに築いた「伝統的」組織や出身の共同体との関係維持の現状を調べ、ヒンドゥー教徒のバリ人が都市において新たな紐帯を形成しつつ出身慣習村の組織に関わる事例を記述した。出身地の慣習村の規則に改変をもたらす意図を移住者は表明しないが、出身村では、遠方に移住した成員を慣習村組織内に位置づける組織改変や現代的行政組織に範をとる慣習村運営など、移住者が関わることによる帰結と考えられる変化が観察される。州都あるいは隣島から出身村の行事に参加するという過重にも見える負担を移住者は、起源kawitanとの関係によって説明するので、起源/先祖を意味するkawitanの概念が鍵となると思われる。

研究成果の概要(英文)：The present study describes the case in which Hindu Balinese commit themselves into the customary village affairs, while forming new ties and connections in the cities where they moved, through investigating "traditional" organisations newly formed in the migrant destinations and the current relationship with their natal village. Though the transmigrants express no intention of attempting to change the customary rules, the observed cases show the changes which should be taken as the consequences of their commitment to the village: e.g., the reorganisation of the traditional institutions so as to place those moved-out members into the organisation or the administration system modelled on the contemporary administrative institutions. The concept of kawitan, meaning origin/ancestry, must be the key to understand the case because the transmigrants explain the reason why they choose to take such an apparent overburden, by referring to the relationships to the kawitan (origin point).

研究分野：文化人類学

キーワード：バリ 移住 慣習 共同体 起源

1. 研究開始当初の背景

現代の人類学/民族誌に必要とされているのは、自律的なローカルな文化をグローバルゼーションによる同質化の動きと対立させるのではなく、地域とそれを超えた領域とを繋いでいる力関係の中で、支配的な文化を身につけ、その際にそれを変化させる仕方を跡づけることである[Gupta and Fergusson 1997: 5]。

近年、バリ州では、移動性の劇的改善(及び移動手段の入手機会の圧倒的な増加)により、都市への移住者が名目上の帰属だけでなく、実際に出身慣習村の活動に参加することがきわめて容易になった。また、携帯電話の普及により、遠隔地の親族ともさまざまな慣習的行事日程の周知や調整が可能となり「空間の圧縮」[Urry 2003]あるいは「時間-空間の圧縮」[Harvey 1999]がバリ人の伝統的共同体のあり方を変えつつあると思われる。

従来、慣習村固有の伝統により「土地に縛られた」バリ=ヒンドゥー教徒は、基本的には一つの慣習村に結びつき、移住先か出身地かのどちらかは名目上のものでしかなかったのに対し、出身地との緊密な関係を維持しつつ、社会経済的圧力のため選択せざるをえなかった移住先での新たな共同体との二重の帰属を生きることが可能になったように見える。また、これが一般的な傾向であるなら、慣習村毎に異なるものだったバリ人の伝統に重大な帰結をもたらすと予想されるが、たんにローカルがグローバルの一部に解消しているのではなく、むしろ、「ローカル」に回帰しているのだということをバリ人の事例は示しているのではないかと考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ヒンドゥー教徒のバリ人が都市において新たな紐帯を形成しつつ、出身慣習村の組織に積極的に関わる事例を通じて、自分たちが伝統と見なすものをどのように形成するのかを記述することである。本研究では、通勤あるいは週末毎の帰省が可能となった都市移住者(デンパサール市)や、通信手段と交通手段の発達により、頻繁に帰省するようになった島外への移住者(西ヌサテンガラ州マタラム市)が出身の共同体と移住先の共同体にどのような形で関わっているのか、その結果それぞれの慣習規則にどう影響しているのかを面接調査から明らかにする。

本研究では、これまで調査を続けてきた共同体の出身者がその出身共同体との絆を保ちつつ、1) 新たに移動先で築き上げている「伝統的」組織や「伝統的」儀礼あるいはその新しい形態、および 2) 出身地の共同体において変更をもたらした、あるいは変更を意図している慣習(村の規則)、の2つを主たる対象として、事例研究を行なう。こうした事例から、不変のように主張される慣習がどのように改訂されるのか、そして、それでもなお不変のように当事者に語られるのはどのようなメカニズムによるのかを説明可能な枠

組みを検討する。

3. 研究の方法

調査では、ある特定の慣習村を離れて都市に移住した者たちに焦点を合わせ、主として聴き取り調査を通じて、彼らが移住先の共同体と出身の共同体にどのように関わり、それぞれの共同体の慣習を変化させる(あるいは変えずにおく)か、を探った。調査地(調査対象者)は、1) これまで研究してきた慣習村、2) この村出身で州都デンパサールに居住し、出身地の活動に積極的関与を続ける者、および 3) (バリ州東隣の)西ヌサ・テンガラ州都マタラムに移住し、出身慣習村との二重帰属を続ける移住者とした。

調査方法は、調査地の出身共同体や移住先の都市の住人宅に短期間滞在中の参与観察を中心として、調査地滞在中に開かれた行事には参加し、行事参加者へオープンエンドのインタビューによる聴き取り調査を行った。さらに、マタラム市では希望者を募ってフォーカス・グループ・ディスカッションを行い、インタビューで得られるような調査者への回答に加え、調査対象者たちの間で自発的に生み出される説明を求めた。

4. 研究成果

1) 慣習村の変化

慣習村役員作成の資料によると、スラット Selat 慣習村の登録成員 2127 のうち、ングラガ(nglaga あるいは ngelaga)は 530 世帯であった。ングラガとは慣習村成員ではあるが村外(郡 kecamatan よりも外)に居住する者を言う。ングラガの成員自体は 1980 年代にも存在したが、ングラガを含む慣習村の成員をこのようなりストにするのはこれまでなかった。

2009 年の慣習村会議(5 年毎に開催)で決まった慣習村組織では、これまでに増えた新たな慣習村役職を廃し、伝統的な役職を中心とした組織に簡素化していたが、実のところ「近代的」とされる部分(parum desa と kertha desa)はその中にさらに多くの役職を含んでいた。2014 年の慣習村会議を経て、再び、組織は複雑化し、中核村民(特定耕地の保有者)以外の成員の規模は変わらない。近年、いくつか大きな儀礼が行われ、そのために多くの人員の系統立った配置が必要となったことに、起因していると思われる。

また、慣習法の改訂、共有財産の一覧作成、慣習村プロフィールの作成、さらには慣習村の歴史を記した本を発行している[Desa Pakraman Selat 2013]。

2) 村外への移住者の事例

バリ=ヒンドゥー教徒の儀礼にはブタが犠牲として用いられるが、先住者ササク人はイスラーム教徒でありブタを穢れていると考えるので、マタラム市のバリ人はふつう、ササク人の集住する中ではなくバリ人同士で集まって住み、バリと同様に近隣集団を構成する。この近隣集団バンジャール banjar

は、ヒンドゥー教徒のバリ人にとり必須の火葬のための相互扶助組織(いわゆるバンジャール・パトゥス banjar patus)とは異なる。インフォーマントは移住先(マタラム市)において、近隣集団としてのバンジャールに加入するほかにも無尽講アリサンと慶弔のためのバンジャールとを組織していた。

アリサンとは無尽講のようなもので、輪番で会員の家に集まって茶菓をとりながらくじ引きで給付者を決める社交をかねた庶民の金融システムであるが、ここでは同時にバンジャール・パトゥスの役割(火葬の相互扶助)を兼ね、バンジャール・スカ・ドゥカ(慶弔組織)ともよんでいる。このインフォーマントの例では、外来者で慶弔(とくに葬儀に関わる)の相互扶助組織を作り、20人ほどの成員を擁している。また、ヒンドゥー教徒のアリサン会 KAUH (=Kelompok Arisan Umat Hindu) と名付けたアリサンも組織、庶民の金融組織としての集まりの他にこれを通じてヒンドゥー教徒としての行事(巡礼を兼ねた旅行など)の組織もしている。

インフォーマントは、以上の3種類に加入している他、出身の慣習村では、1) ムンティグ寺院の信徒集団プマクサン 2) バンジャール・パルマン(正式にはパルマン・シラダルサナ)というバンジャール・パトゥス(火葬のための相互扶助組織)の1つ、および3) 慣習村に属している。慣習村への帰属は、慣習村内のバンジャールを通じてなされる、すなわち、バンジャール・パルマンに属していることで自動的に慣習村の成員となる。

プマクサンとは任意に形成される檀家集団で、何らかの契機(例えば、病気治癒の祈願で治癒したのでその神の信徒集団に入るとか)で特定の家系と関わりなく形成されるものである。ムンティグ寺院は現在、慣習村の寺院となっているが、もともと村の領主の家系(Arya Dauh)の屋敷寺院 pura penataranとして建てられたものである。このムンティグ寺院のプマクサンに所属すると周年祭の参加、ウサバ(祭)の際にご神体を慣習村の中心寺院(puseh)へ出すこと、椰子の実の供出、50,000ルピアの寄付が義務となる。マタラムに住んでいるので、これらの出費についてはスラット在住の姉、労力の供出には甥に代わりを頼んでいる。別のインフォーマントも同じプマクサンに所属、出身村に在住している弟に代役を頼んでいる。

バンジャール・パルマン Parumanにはまだ所属(nglaga 成員として)しており、75,000ルピア/月を支払っている。定例の会議 sangkep は、ウサバ(祭)の準備の日開催され、これに参加する(以前は祭の時に行われていたが、早々にみな帰ってしまうので変更された)。上述のように、このバンジャールへの所属を通じて、慣習村にも所属すると理解される。

バンジャールに能動的に参加していないと

後に自分の火葬の時にバンジャールの成員の助けを得られない恐れがあるので、市の火葬場を使用する。(例えば、この村出身で教育文化省の官僚となったある有力者の場合、ほとんどデンパサール市で過ごしていて、村の火葬の時に手伝いに戻っていないので、デンパサール市で行えるように夫妻の葬儀費用を用意したと言われている。)

4) デンパサール市とマタラム市との違い

マタラム市はデンパサール市の半分ほどの大きさで人口も半分ほどである[デンパサール市の人口 788,445 (2010)広さ 127.78 km², マタラム市の人口 402,843 (2010)広さ 61.30 km²]¹。どちらも州都で、県 kabupaten と同じレベルの自治体である。デンパサール市には行政村にあたるクルーラハン kerlurahan に加えて、慣習村 (desa adat あるいは desa pakraman) が存在する。移住先のデンパサールで行政村の隣組組織に加えて、火葬の相互扶助組織である伝統的なバンジャールに加わるならばそのバンジャールを通じて、慣習村に帰属するはずである。しかし、一般に、島内での移住では移住先では客員成員 krama tamiu (krama は成員, tamiu は客を意味する)としてのみその慣習村に関わり、主たる帰属先は依然として出身の慣習村である。それにより、移住先で死んでも火葬儀礼自体は出身の慣習村で行われる。州都と慣習村との距離は 65km 程であり、デンパサール市で死亡しても直ちに慣習村で葬儀を行うことが容易だということによるものと思われる。

一方、マタラム市の場合は、フェリーの増便のため無理をすれば早朝に出発して夜中に帰宅することも不可能ではないとはいえ、現実的ではなく、また、飛行機を利用したバリとの往復も費用が80万から100万ルピアとなりこれも現実的ではない。便利になったとはいえ、それほど簡単に帰省できる距離ではないにもかかわらず、出身村のバンジャールに客員成員として帰属し、それにより慣習村にも帰属し続けている。

それを続けさせる仕組みの最も重要なものは死後の安寧のためには火葬儀礼が必要だという信仰だと思われる。デンパサール市の場合は比較的容易に慣習村との関係を維持しつづけられるにも関わらず、村での火葬儀礼を受けない例があった。慣習規則上のタブーで (leteh 穢れ) 村内で火葬できなかった事例と、同様に、直ちに火葬しなければならない家系にありながら、大儀礼の予定があるので火葬を慣習村内でできないためにデンパサール市の火葬場で行った事例はあるが、多くはいぜんとして村での火葬を選んでいる。例外的に、官僚や大学教員としてデンパサール市に暮らす者が、出身村での付き合いに消極的となり、結果的に、葬儀の際の村での援助を期待できずに、伝統的紐帯無しにすませることのできるデンパサール市の火葬場での葬儀を選択している場合があった。

マタラム市では(埋葬しなければならない) イスラム教徒(ササク人)が多数派であるということもあり、そうしたビジネスとしての火葬場に頼ることもできない。新規の移住者が新たに相互扶助組織としての慶弔バンジャールを形成したのも当然のことに思われる。しかし、それであっても出身の慣習村での火葬を選択できる余地を残している。そのために、出身村のバンジャールにも nglaga として所属(それにより慣習村にも所属)し続け、分担金の支払をするだけでなく、儀礼の際にはできる限り帰省し実際に参加する。これはここに記述した特定のインフォーマントについてだけではなく、インタビューしたすべてのマタラム市の(比較的新しい)移住者に共通する(「比較的新しい」と限定したのは、マタラム市にはカランガスム王家によるロンボク征服に伴って移住したバリ人の子孫もいるが、彼らはこれにあてはまらないからである)。

過重の負担とわれわれには思われる出身慣習村への帰属と積極的な参加は、しかし、当事者にとっては負担ではないと捉えられている。フォーカス・グループ・ディスカッションの結果では、今後、この生活のあり方を続けるのか、あるいは定年後は再び出身の慣習村に戻るのかは、それぞれの家庭の事情によって様々であり、確定しないが、すくなくとも現在のように苦勞してでもバリの出身村の儀礼に参加するのは、むしろ「祝福」であるという主張であった。「祝福」というのは、先祖 kawitan が慣習村にあるからだという。

5) 起源の概念

ここで先祖を表すのに使われた kawitan に注意を払う必要があると私は考える。フォーカス・グループ・ディスカッションはほとんどインドネシア語で行われたが、先祖を意味するインドネシア語である leluhur ではなく、起源も意味するバリ語 kawitan が用いられたことから、たんに先祖のいた慣習村だから、というのではない意味があったのだと推測される。

Kersten のバリ語辞典[Kersten 1984]によると kawitan は kawit(出身地)から派生し、1) 出身地、2) 祖先、先祖の意味をもつ。一方、kawit の語根は wit であると考えられ、起源を意味するサンスクリットに由来するとも言われるが、同じ辞書では wit は 1) 起源、出身地を意味するとともに 2) 敬語の wit は普通語の punya と同じく、木を意味するという。このことは、オーストロネシア諸語で*wit が木を意味していること[Blust 2013]や東インドネシアで木の幹が起源を表すことと考え合わせると示唆的である。たんに祖先崇拜の結果であるというのなら、彼らはそれぞれ父系氏族集団に属しているのに、その帰属だけで十分なはずであるのに、先祖の生まれた慣習村に帰属し続けることを選ぶというのは、たんに血縁の先祖を意味するのではなく、「起

源」の土地への帰属を意図しているのだろう。それだから、先祖を意味するインドネシア語 leluhur ではなく、起源/先祖(そしておそらく語源的には木/幹)を意味する kawitan をあえて用いたのだと考えられる。

以上の結果は、個別的な事例の記述であり、事例そのものも、調査対象者も統計的な代表性をもつものではない。だが、社会科学の目的は「経験的な規則性にはなく、むしろ構造や機構にある」(Danermark, et al. 2015: 133) という観点から見ると、次のような構造を考えることができる。すなわち、高等教育や就職の必要のような社会経済的圧力という、ローカルを超えた力関係により都市への移住を余儀なくされるとともに、経済的発展に伴って出身村との関係の継続が可能になり、ローカルな慣習にしたがって、負担に耐えて(負担とは思わずに)出身村への積極的な参加を続ける背景には、オーストロネシア起源にすら遡るかもしれないローカルな概念がある。

参考文献

- Blust, Robert, 2013, *The Austronesian: languages Revised Edition*, The Australian National University.
- Danermark, Berth., Mats Ekström, Liselotte Jakobsen and Jan Ch. Karlsson, 2015, 佐藤春吉監訳『社会を説明する』ナカニシヤ出版
- Desa Pakraman Selat, 2013, *Kanjuruhan Baledan-Selat: Lumbung Pura Besakih Gunung Agung*, Desa Pakraman Selat, Karangasem.
- Gupta, A. and J. Ferguson (eds.), 1997, *Culture, Power, Place: Explorations in Critical Anthropology*, Durham: Duke University Press.
- Harvey, D., 1999, 吉原直樹監訳『ポストモダンティの条件』青木書店
- Kersten, J. 1984 *Bahasa Bali: Tata Bahasa, Kamus Bahasa Lumrah*, Nusa Indah.
- Urry, J., 2003, 吉原直樹監訳『場所を消費する』法政大学出版局

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

{その他}
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 潔 (NAKAMURA Kiyoshi)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号: 60217841

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

様式 C - 19、F - 19、Z - 19 (共通)

(3) 連携研究者
()

研究者番号：